
春待ち

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春待ち

【Nコード】

N5848J

【作者名】

朱鷺

【あらすじ】

目を覚ましたら、君の笑顔。

高校卒業を間近に控えた冬の日。

なんにも変わらないわたしたちが、そこにはいた。

冬が割れる音に、ふと目を覚ました。

いつの間にか暖められていた教室。目の前でトワが「おはよう」と笑った。

誰もいなかった空間に、ポツリポツリと人が増えていく。ぼんやり眺めていると、「トーコさん昨日何時に寝たの？」おかしそうにトワが、言葉を続けた。

黒板の前に置かれたストーブの周りで、南さん達がお喋りしていた。欠伸をしながら増井君が教室へ入ってきた。

今日も、一日が始まるのだと。そんな風景を見て、実感する。

わたしは小さくため息をついた。

「トワの名前が“永遠” って書くんだったら面白かったのに」

「なに？ すっげー唐突。でも、残念だったね」

十和とわ 新は、あらた やっぱりおかしそうに笑ってそんなことを言った。

何人ものクラスメートがトワに声を掛けて。トワはその一つ一つに明るい返事をしていた。本当に、トワは好かれているな、と。毎朝同じようなことをわたしは思っって。そんな トワがどうしてか毎日わたしの傍に来たりするのか、同じに毎朝不思議に思っってばかりいた。

高校に入って、初めて会った。十湖^{とっこ}ってわたしの苗字、名前みたくして呼ぶ。黒い髪が茶色くなってた、高校二年生。このまま腐れ縁になったらどうする？って笑ったわたしたちは、もう高校三年生で。だけど、トワは、髪の毛が再びに黒色に戻った以外になんにも変わらない。

「でもよかった。だって、もし“永遠”なんて書くんだったら、オレ産れた時から名前負けだもんな。ほんとと、よかった」

「……。」

「なに？」

「変なの」

『もしも』の話、現実には当てはめて。心底ほっとした顔をしたりするから、思わず笑ってしまった。

窓の外、雲の隙間から射し込み始めた光が暖かい。見上げると、ほんのり眩しくて目を細めた。

「トーコさん。もうすぐ、卒業だね」

しみじみといった感じに、トワが言う。

そうか、って思う。もうそんな時期にまで来てしまったのか、と。こんな風にトワと会話することなくなるのかな。そんなことを思うと、少しだけ寂しくなる。

トワはどんな風に思っているのか、じつと彼の顔を見つめてみたけれど、それが分かることはなかった。

教室の向こうで、トワを呼ぶ声がする。

「オレ行ってくるわ」

立ち上がった彼を見上げた。

「身長、高くなった？」

ふと、問うと「なに？ 今更」彼は笑って。

「ちょっとだけね」

と言った。

＊

星が、光っていた。たぶん、一番初めの星。

今日の月は、綺麗に欠けて透明だった。

静まり返っている夜。足音だけが響いているような。

じっと耳を澄ましながらわたしは歩く。

世界が呼吸している感覚が、心地いい。

「トーコさん、待って!」

足音がする。聞き慣れた声と一緒に。振り返ると、マフラーをなびかせたトワが走ってくる。肩で息をして、「いつつも先行くしつ」と、不満そうな顔をする。

「あ。ゴメン」

「別に。いいよ。約束してるわけでもないし?」

「ああ、そうだよね。そういえば」

「約束しようよ。この際だし。もう卒業だし」

「今更?」

わたしは笑って、歩みを進めた。

トワも隣をゆっくり歩く。空を見上げて、息を吐いて。気持ち良さそうに、仰ぐ。

「今更なのがいいんじゃない?」

「そういうものかな」

「うん。たぶんね」

同じ“ト”で始まるから。隣同士だった。高校一年生、春。トワがなんてわたしに声を掛けたか、実はあまり覚えていない。わたしはひたすらぼんやりとして。ただただぼんやりとして、窓の外に散る桜の花を見つめていたことは、覚えていなければならない。

気がつけばトワはいつもそこにいて。なんでかいつでもそこにいて。いつの間にか当たり前の日常に、トワがいるようになっていた。簡単だったのかもしれないけれど。わたしの日常に潜り込むこと。トワにはなんでもなかったのかもしれないけれど。

たぶん、わたしにとっては、世界が少し色づくような。そういう、大きさがあったと思う。

「トワに会えてよかった」

なんとなく、言いたくなった。

「それこそ今更でしょ」

トワが、笑った。

今まで二人でどんな話をしてきただろう、と。ずっとずっとの今までを思い出していた。どれもこれもが些細過ぎて、明確に思い出すことは難しかった。

何気ない日常、という言葉があまりに当てはまる二人だった。そう、何気なかったのだ。トワがそこにいることが、すぎるほどに、

何気なかった。

進路希望。向かいたい将来。真っ白の紙に、シャープペンで。見えない未来のままで書く大学名。入学時から繰り返されてきたそれは、今になってやっと現実味を帯びて目の前に。そういえばトワとは、そうした話を一度もしたことがない。はっきり言えることはそれだけで。それだけなのに。トワといられる時間を、少しでも大事だと思えることが、なんだか不思議に思えた。

なにを言っても「今更」なようだった。なにを言ってもたぶんもう、口にする前からお互い知っていたことで。きっと、それはもつとずっと前から口にしてもよかったようなことで。卒業の二文字がちらつき始めてやっと、わたしたちは「今更」、その想いを零し始めていた。

「寒いね」

トワが言った。

「うん」

それもやっぱり「今更」だ、と。わたしは笑った。

二人の足音が響く。この冬の終わりに向かう、静寂の中の。

本当に全てが今更になった時、わたしはなにを想うだろう。手も届かないほどの「今更」になにを想うわたしがいるだろう。

最近のわたしは、あまりよくない。

見えない時のことばかりを、考えすぎているから。

そのどうしようもなさには、途方に暮れそうになるばかりなのだから。

*

朝の、まだ誰も踏みしめていないような空気の中が好きだった。

校舎が、じっと静寂を鳴らして。グラウンドからは微かに、部活動の音がする。

テキストを広げながら、頭の中に入っているのか入っていないのかも分からないで、ひたすらに文字を追う。

全てを覚えてしまっているようで、実は全然覚え切れてもいなくて。不安を隠すみたいに、ただただ笑って。そんな、そこはかとなく強い、みたいな。細かい交ぜの感情の残滓が染み付いている教室の中だった。もちろん、わたしも変わらず。なにがよくて、なにが間違っているのかも、なにも分からなくなりそう。それでも今はやるしかない、そういう一方的な風に飲み込まれていた。

自分を見失ったりはしていないと思う。

だから、ただ、分からないだけで。本当にただ、分からないだけで。

知らず、ため息を吐いているわたしがいた。

テキストを閉じる。

そのまま机にうつ伏せて、目を閉じた。

カタ、と誰かが教室に入ってくる音がした。そっと足音が近付いてくる。目の前の机、鞆を置く。椅子をゆっくりと引く。わずか、ギツと椅子と床の擦れる音。音は、そこで止まる。人のいる気配を漂わせたまま、じっと、そこに。

「視線って、なんか刺さってる感じがする」

ふと、わたしがそう口にすると、目の前に座る彼が笑った。

「なんだ、気付いてたの？悪意はないよ？」

「分かってます。おはよう、トワ」

起き上がると、トワが柔らかい朝の光に包まれていた。帯びた色に、まるで透けていくように。

「消えちゃいそう」

ぼんやり眩くと、やっぱりトワは笑って「なにが？」と聞いた。そして、わたしの腕の下のテキストを、すっと抜く。

「抜け駆け禁止。」

「こんな時期に？」

「ダメだって、トーコさん。オレは本当に余裕ないんだから」

言いながら彼は、わたしのテキストを自分の引き出しに仕舞いこんでいる。

「余裕ないなら、むしろそれを開けるべきじゃない？」

一昨日、英単語帳を見ながら「プラクティス？」と、今更それはどうだろうと思われる仕種をしていた彼を思い出す。

「うん。でも、オレには全然、まったく微塵も余裕がないから。だから、ダメ」

そのくせ、彼はテキストを開くことを良しとしない。同じような言葉を連ねる、強調。

全然、まったく微塵も。

「ねえ」

「ん？」

「今の、なんか間違ってる」

「どこが？」

「全然、まったく微塵も」

ちぐはぐな、会話。

けれど、トワの中では、正しすぎる真っ直ぐの会話。

「合ってるよ」

「そうなの？」

「うん。合ってるんだよ。トーコさん」

トワが、じっとわたしの目を見つめた。来月は受験だというのに。そして放たれる、なんだか信じられない一言。

「二人で遊びに行こうか」

「は？」

こんな時期に？と。口にすることは、もう止めた。言わなくても表情だけで伝わっている、きっと。

「なんてね。分かってる。無理なことぐらい」

「うん。無理」

わたしは真っ直ぐ頷いて。きっぱりその旨を伝えた。

彼は、残念そうな顔をして窓の外へと視線をやった。

「あーあ、オレは本当に余裕がないのに」

「変なの」

「変じゃないよ」

「そうなの？」

「うん。全然、まったく微塵も」

トワが、わたしの机に肘をつく。

「トーコさん、もうすぐ卒業だね」

最近の口癖なのだろうか。ふと口を噤んだ後に、彼は卒業の二文字を声に出す。

トワ、どこの大学に行くの？

ふと、聞こうとした言葉。なんでか飲み込んだ。

そういえばわたしは、そんなことすら知らないのだった。そんなことすら、知らないのだった。

「トワ」

「ん？」

「君の誕生日って、八月十五日だよね」

「そうだよ。夏休みだからみんなに忘れ去られる寂しい誕生日。なんだ？」

「トワの誕生日くらいは、わたし知ってるなあ、と思って」

「トーコさんは、五月七日。」

「うん」

「オレも、トーコさんの誕生日くらいはちゃんと知ってる」

知ってる、って。どういふことなのだろうか。なんて、考え始めていた。

血液型。誕生日。家族構成。エトセトラ。

知ってるって。どういうことなんだろう。そこに君が存在している。それだけのことを知っているのに。どうして足りないと思うのだろうか。

トワが笑うことを知っている。怒ることも知っている。哀しそうにすることも知っている。楽しそうにすることも知っている。

ああ、なんだ。案外わたしはトワを知っている。そう思うのに。こうして過ごす毎日の中、君の事を何も知らないのだと、何度も思い知らされる。

「ほんと、トワってやっかい」

呟くと、「うわ、ひでー」と、彼が苦い顔をした。

「うん。でもね、たぶんお互い様だと思う」

わたしがそう続けると、肘をついたまま彼が笑った。染め直され
たばかりの黒い髪が、ふっと揺れる。

「そうなんだ。それならいいんだけど」

言いつつ、空いた片方の手を窓に伸ばして、曇ったガラスに太陽
を書いてみたりしている。

「小さい時にさ、親父の車の窓にこれと同じことしたら怒られた。
跡になるからヤメロ、って」

「へえ」

「でもオレ楽しくてさ。曇ってる場所全部にラクガキし尽くしたけ
どね」

教室の中。ざわめきが広がっていく。冬の、朝の光景。

単語帳を手に問題を出し合っている子たち。一人でもくもくとノ
ートに向かってる人。ストーブの周りで派手にお喋りしているグ
ループ。いつの間にか賑やかな空間がそこにはあって。そこはかと
ない落ち着きのなさに、満ちていて。

この光景を、いつか見なくなる日が来ることを、ぼんやりと不思
議に思った。

わたしとトワの視線が、自然と重なる。

わたしたちは何も言葉を発することなく、お互いを見つめていた。
先に目を逸らしたのは、彼の方だった。

「勉強。しよっか」

そして、観念したように言って、さっき奪ったテキストを返してくれた。

＊

ふと立ち止まる時、やたらと時間の流れていることを実感する。

日々は、本当に静かにそこはかとなく続いていて。明日はもう受験だというのに、わたしは変わらずトワと帰路についている。

トワの視線が、よくわたしに止まる。じっと、見つめて。そして、逸らすことが、最近はとも多くて。「なに？」と問うのに、彼は本当になんでもなさそうに「なんでもないよ？」と言うのだった。

「あーあ、オレ、本当余裕ないのになあ」

トワが唐突に嘆いた。

「どうしたの？」

彼は、空を見上げたまま、横目でそっとわたしを見やった。

「トーコさんさあ、彼氏出来なかったらオレと付き合おうよ」

そして、やはり唐突に、そんなことを言った。

「なに？ いきなり」

「大学入ってからの話。」

「え？」

「卒業してから疎遠になる人って多いらしいからさ。しかも、オレらの場合、お互いのメルアドも電話番号も知らないじゃん？ でもさ、このままの状態で卒業して、それでもどっかで偶然会えたら結構奇妙な感じがする。すげーことだっと思うから。その時、トーコさんの中に誰もいなかったら、オレと付き合おう？」

「トワ？」

首を傾げたわたしの腕をトワが掴んで、その歩みを止めた。

少し先の街頭が点滅している。

彼の目が、真っ直ぐにわたしを見つめて。いつも纏っている穏やかさのまま、言葉を続けた。

「告白予告。オレの、恋人になって下さい。って。卒業してから一番初めに会った日に、オレはトーコさんに言う」

「……。」

いつもは紡げるはずの言葉が、なにも思いつかなくて。わたしは啞然として彼を見つめ続けた。

「だから、トーコさん。その時、彼氏とかいなかったら、付き合おうね」

そして、トワはニツコリ笑って、わたしの腕からその手を離した。

トワの中でだけ辻褄があっているような、そんな言い方に、わたしは完全に置いてきぼりをくっていて、次に発する言葉を探すことだけが、唯一できることだった。

「で？わたしは一体どうしたらいいの？」

「頷いてくれればそれでいいよ」

「頷くの？」

「そう。約束。あ、別にここで振ってもいいんだけど……」

「え？」

「嫌だけど。仕方ないっていうか。それはトーコさんが決めることだから」

難解な数式、目の前に掲げられているみたいだった。実はすごく単純なのに。どうしてかわたしはひどく混乱していた。

「それは……」

「ん？なに」

「卒業したら、偶然に頼る以外会えないってこと？」

「まあ、そういうこと」

「君にコイビトが出来たら、この約束は無効？」

「……そうだね」

「告白予告に断るのって、なんか変だよね」

「そう？」

「だって、予告って未来でしょう？つまり、わたしはまだ告白されていない状態なのに、断るの？」

「そうなるね」

「それって、すごく変」

短い瞬間で、もうどうにもならないほど糸を絡ませて。

結局わたしは、顔をしかめてトワを見上げること、全てを解決しようとした。

「やっぱり、トワってやっかい」

やっと口にできたわたしの中の結論。トワが声を上げて笑った。

「で？」

そして、わたしの返事を求めてくる。

断ってもいいよ、と簡単に言っただけの割りには真剣な顔をして、目の前に立っている。

少し先の電灯が、ジジッと鳴ったような気がした。

「うん。面白そうだから、乗ってみる」

そして、わたしは大きく頷く。

「面白そう？」

「うん。面白そう」

「トコさん、オレさ、すっげー余裕ないんだけど？」

「だって、すっげー余裕ない割りに猶予があるから、面白いでしょ？」

「うん。でもオレ余裕がないから。本当ないから。撤回とか、受付けないからね」

さつきから、トワの言うことはめっちゃだった。それでも、やっぱり彼の中では変わらずそれらは一貫していて。きっと、わたしが彼じゃないから、こんなにも頭の中でハテナを飛ばしたまま会話をしているのだと思った。

少しだけ、細かいことがどうでもよくなっている。トワの中で全部分かっているならそれでいいかって、なっている。そういえばわたしとトワはずっとこんな風に会話をしてきた気がする、と难道がおかしかった。

「寂しくなるね」

わたしは、笑みを引っ込める。

「うん」

トワが、優しい顔をしていた。

「そっかあ」

嬉しいのと。寂しいのと。楽しみなのと。苦しいのと。

そうか、わたしトワが好きだった。と、今更明確になった感情。

別に、ずっと知っていたけれど。はっきり想うと、それだけの分、寂しいのが募った。

なにもないのに、地面を蹴ってみた。ザッとアスファルトが鳴った。

「トワ」

「ん？」

「なんか、分かる気がする」

「そ？」

「なんとなく。“今”じゃない。っていうか。そういう感じ。分かる気がする」

制服を着ている今は、なにか、違って。たぶんそれは、今までのトワとわたしでいたいから。

きっとほんの少し崩れるだろう二人になるのが、とても違和感で。朝の教室で静かに喋ったり。こうして二人で帰ったり。そうした日常を、わたしたちはもう少しだけ続けたいと願ってもいる。

卒業までの日数は残り少なくて。

君が離れていってしまうのに。

本当にどうしようもないことなのだけれど。

トモダチでいられる二人がとても大切で。少しを変えていくことが、もったいないような、それすら寂しいような。複雑な想いがある。

卒業、って。一個区切りが欲しかった。

トモダチを、一回終わらせるのが、大事なのかもしれなかった。

今すぐだって、別にいいのに。随分な遠回りを選んで。

そんなことに頷いてしまうわたしに、やっかいなのは、トワだけじゃないなって。思わず苦笑いをした。

「トーコさん」

「ん？」

「頑張ろうね、受験」

少しだけ力を込めて、願掛けみたいに。トワが言う。

「うん」

トワの目を見つめたまま、わたしは頷いた。

心の奥が、小さく打って。痺れている。沢山すぎる緊張を押し込めすぎたりしたせいで、それは少しずつ溢れ出す。

ゆっくりと息を吐いた。

緊張は溶けない。

寂しさも募る。

どうにもならない、どうしようもない想い。

「トワ」

眩くみたいに名前を呼んで見上げると、彼がやっぱり優しい顔を
してわたしを見たりするから、少しだけ泣きそうになった。

本当に、わたしは今更ばっかりだ。

そういえばトワは、ずっとこんな風に優しかった。

＊

『ねえ、トーコさん』

夢を見た。

トワと初めて会った日の夢。

記憶のずっと奥底は、その日をなにも忘れてはいなくて。それは、
ひどく鮮明だった。

受験日。朝。

お母さんが鞆に括り付けてくれたお守りが、鞆の横で踊っている。何度深呼吸をしても緊張が解けることはなくて。色々な制服の集団に混ざったわたしは、どんどんわたしを失くしていくようで。たぶん、あまり冷静ではなかった。

独特すぎるその雰囲気、頭に詰め込んだはずの色々が抜け落ちそう。完全に余裕のない人で歩いていた。

『大学入試会場』の文字が目に入る。知らず、手を握り締めていた。

見慣れない校舎。ひどく遠いような。それでも踏み出さなければいけなかった。

大丈夫の言葉を、自分に対してひたすらに繰り返す。

人のいる、静寂。誰もが緊張している、静けさだった。

誘導の人の声に沿って、玄関を潜る。広いロビーが、わたしたちを迎えて。教室を割り振る、受験番号の羅列された紙が強調されている。教室の場所を確認して、掲示板から目を離れたその時だった。

「あれ？ トーコさん？」

あまりに聞き慣れすぎた声に呼び止められる。

わたしは一瞬怪訝な顔をして、そんなにトワに会いたかっただろ

うかと、空耳の疑いをした。けれど、目の前に立っているのは、紛れもなく「十和 新」その人で。

「なんで？」

思わず出た言葉に、彼はいつもの調子で「ひでー」なんて、笑った。

確かめなくても、そこにいるだけで彼の目的は一目瞭然なものにも関わらず。信じられない気持ちで、彼の手にしている受験票を凝視してしまう。そこには当たり前前に、わたしが受けようとしている大
学名。

昨日に引き続き唾然としているわたしを他所に、トワは「まさかこんな所でトコさんに会えるなんてなあ」と、わざとらしく言うてみたりしていた。

「うわあ、ヤベ。オレ、絶対受かろう」

あまりにこの受験会場の色には合っていない表情で、壮大にそう意気込む。

わたしは往生際悪く、まだ信じられない気持ちで呟いた。

「……トワ。君、謀ったでしょう？」

すると、トワは意味ありげな顔をしてわたしを見下ろした。

「だって、言ったじゃん。余裕ないって」

「全然。まったく微塵も？」

「そう。全然。まったく微塵も。だから、トーコさんも受かってね」
そして、あんまりに軽くそんなことを言っただけたりする。

ここの大学の倍率分かってる？、そう問おうとして、最早それは愚問に過ぎない、と口を噤む。

「トワ」

「なに？」

「君、やっぱ変だよ」

呆れて物も言えない。だけど、ここ最近の彼の欠伸の量の半端のなさと思うと、場違いに笑みが零れてしまう。

「しょーがないよ。だって、オレはトーコさんが好きなんだから」

そして、トワはさらりとそんなことを言って、「じゃあ、オレあっちだから」と受験票をひらひらさせて、すっと通り過ぎて行ってしまった。

「ほんと、勝手だなあ」

その後ろ姿を見つめながら、思わずそんな言葉が漏れる。

小さくついたため息は、トワへの呆れなのか、心が少し嬉しくなってしまった自分への呆れなのか。どちらにしても、同時に笑みが

零れてしまう。

手のひらを握り締めた。

そうすれば、なにかが違たがうことなどないような気がして。

トワが、ただ真っ直ぐに見ている未来ときが、きっと叶う気がして。

わたしの願いが一つも零れることなく、そこにあり続けるような気がして。

だから、手のひらを握り締めた。

どうか。どうか。どうか。

誰に願うともなく。わたしはそう繰り返していた。

トワの姿が視界から消える。腕時計を見ると、もうすぐそこに受験開始時刻が迫っていた。

深呼吸をした。

きっと、大丈夫。

そこに君がいる。

たったそれだけのことが、わたしの揺ぎなさだった。

＊

「ねえ、トーコさん」

「んー？」

「オレね。名前読んだ時、トーコさんがそうやって見上げてくれる感じがー好き」

受験からの帰り。冬は固い表層を幾重にも重ねて、緩やかに吹く冷たい風を閉じ込めていた。コートを着ていても、寒さから逃れられることはなく、白い息を吐きながらの帰り道だった。

いつもと変わらない。学校帰りみたいに。トワはわたしを追い駆けてきた。走って暖まってしまったのか、寒さなど微塵も気にする様子もない。閑散としたような空気をまるきり無視して、彼は彼の色のまま。耳慣れた口調で喋る。

「なにそれ」

わたしはトワの言葉に笑いながらさりと答える。すると、トワはがっくりきたように肩を落として、ため息をついた。

「そんなスルーの仕方って、あり？」

「……。 “なし” 。に一票。かな」

考え考え返すと、トワが納得のいかないみたいなの、複雑そうな表情をした。

「その答えは？ “あり” だと思ってんですか。トコさん？」

「“なし” なの？」

「“なし” だね。それはないよ」

「そう？」

「そう。だって、オレどうしたらいいかわかんないじゃん」

「どうしたらって？」

「つまりー」

トワは言って、「はい」と角張った片手を差し出してきた。

「つまり、これくらいは誘っていいかどうか、って。話。」

片手を差し出したまま、トワはわたしの返答を待って「どう？」と首を傾げた。

ちょうど見上げたすぐそこにある目と、何秒か見つめ合って。トワの手へ視線を下げる。

寒さで赤みがあった指先。なんだ、トワも寒かったのか、と当たり前のことを思ったりしてから、コートのポケットの中で片方だけ

手袋を脱ぐ。

そして、外気に触れて寒くなった手を、ゆっくりとトワの手に重ねた。

「冷たい手」

呟くように口になると、トワがわたしの手を強く握って笑った。

「すぐあつたまるよ」

そんなことを言って。彼は、優しく優しく、笑った。

『ねえ、トーコさん』

『んー？』

『——ちようどいい？』

『……。なにが？』

『オレの顔。見上げるの、ちようどいい？なんか、こう、視線がピタッとはまるよね』

『……。よく、意味が分からないんだけど。十和^{とわ} 新くん^{あらた}？』

今日見た夢を、思い出していた。

君と出会った、桜の頃を。

微かな予感ほ胸の中。ずっと深いところで眠っていた。

トワが、わたしの手を引くように歩き出す。

他愛もない話が始まる。

「ねえ、トーコさん」

トワがゆっくりと始めた、ひそやかなひそやかな、ふたりごと。

一歩ずつの歩幅を同じに合わせて。白い息を吐きながら。

二つの靴音が、冷たい空気に混じっていく。

空を覆うのはたぶん、雪降らしの雲。

音もなく降る愛しさの色は、眩むほどにきつと、白い。

はぐれないよう繋いだ手。

見上げた先に咲く、色鮮やかは。

ただ唯一の、揺るぎない永遠。

柔らかな声が鼓膜を揺らす。

それは静やかに冬を割る、あたたかくて愛しい君の声。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5848j/>

春待ち

2010年12月31日07時57分発行